

東大 最前線

セカンドライフで街の建設

インターネット上の3D仮想空間に、自分の分身(アバター)を置いて、ショッピングをしたり、他のアバターと話したりして楽しむ「セカンドライフ」。仮想の土地を購入し、自分好みの建物を建てて楽しむ人もいる。03年のサービス開始から、利用者は増え続け、総利用者は世界で1千万人を超える(08年7月現在)。



まつうら まさひろ 客員講師
松浦 正浩
(公共政策大学院)

96年工学部卒。三菱総合研究所研究員などを経て06年マサチューセッツ工科大学博士課程修了。07年より現職。

コンペは、セカンドライフの中の「島」を二つ貸し切って行われる写真。各チームは、建設資金をリンデンドル(セカンドライフ内の交換取引に用いられる仮想通貨)で受け取り、11月まで、街の建設に取り組む。まちづくりのテーマは「エネルギー・環境の観点から見た持続可能性」。

仮想空間でも人はもめるか

術などの専門家により、街の設計が決められる。賞金は無いが、セカンドライフ内の広い敷地を無料で自由に使えるとあり、積極的なユースが集まっているという。また8月からは二次募集として、個人で自由に使える区画を無料でレンタルする予

松浦客員講師の専門は、まちづくりなどの公共政策における合意形成や交渉の過程など。80年代後半のバブル以降、公共事業への反対運動が大きくなったことを受け、「もめ事を解決して皆が納得していたら、一瞬で高層ビルが建ち並び、景色を台無しにしたこともありました(笑)」。

そこで、「セカンドライフの中でまちづくりをさせてみれば、現実とは異なる特徴が見られるのでは」と思い付き、コンペを開催することにしました。

「どのよう
なルールの下
に街をつくら
ていくか、参加者同士で一か
ら話し合ってもらいます」と
松浦客員講師。話し合いのル
ールを決めること自体、もめ
事材料になり得るからだ。

できる公共事業の在り方とは何か」という問題意識が芽生えたという。案件の利害関係者が集い、議論のまとめ役(ファシリテーター)が入って計画を考える「コンセンサス・ビルディング」の手法などを研究してきた。

松浦客員講師が初めてセカンドライフを体験したときに感じたのは、参加者の討議に基づくまちづくりが行われていないことだった。利用者は、ほぼ自由に建物を建てているが、他人の土地に建てた物に対して事実上文句は言えない。「自宅」から海を眺め



まちづくりのコンペが行われているDeliberative Democ rack島。四分割されている(写真は松浦客員講師提供)

(西山竜一)